

古英語韻文における属格名詞と主要部名詞の語順について

入学直哉*

On the Word Order of the Genitive Noun and its Head Noun in Old English Verse

Naoya NYUGAKU*

The aim of this paper is to investigate the word order of the genitive noun and its head noun in Old English verse. Previous studies on the subject in Old English prose have pointed out the following facts: (i) the genitive noun could be placed either before or after its head noun, (ii) the genitive of proper names had a strong preference to occur pronominally throughout the Old English period, (iii) the word order gradually shifted from postnominal genitives (NG) to prenominal genitives (GN) during the Old English period, and (iv) the shift from NG to GN was affected by animacy. We have examined whether these facts found in prose hold true for the word order of the two nouns in verse. As a result, it has been revealed that in Old English verse the shift of the word order from NG toward GN from the early Old English period to the late Old English period did occur and animacy did not have any influence upon this syntactic change.

Keywords: Old English verse, genitive, word order, alliteration, animacy

1. はじめに

本稿の目的は古英語韻文における属格名詞とその主要部名詞の語順について考察を行うことにある。¹ 語順や前置詞などにより語の間の文法関係を規定する分析的言語である現代英語では所有関係を表す場合、(1)に示す通り s 属格(N1's N2)と of 属格(N2 of N1)の二通りの統語形式が可能である。²

(1) a. What is *the ship's* name?

b. What is the name *of the ship*?

(Quirk et al. (1985:321))

しかし、古英語は主として名詞や形容詞等の屈折や動詞の活用により文法機能が表示される総合的言語であるため、of 属格は未だほとんど発達しておらず、所有関係は専ら屈折形によってのみ表されていた。古英語から中英語に掛けての屈折形/s 属格と of 属格の頻度は Thomas (1931)

* 教養部

規則及び韻律規則を優先するために、しばしば異常な語順が生じることがある。入学(1998)では *The Battle of Maldon* における「形容詞＋名詞」の語順に韻律規則がどの程度影響を与えているかについて検証した。現代英語と同様に古英語でも「形容詞＋名詞」が無標な語順であるが、筆者の調査では *The Battle of Maldon* では名詞が形容詞によって修飾されている全 60 例のうち 15 例が有標であった。以下にその有標な例を 2 つ挙げておく。

- (5) he let him þa of handum leofne-A fleogan
 he let him then of hands beloved fly
 hafoc-N wið þæs holtes, and to þære hilde stop;
 hawk toward the wood and to the battle advanced (Mld 7-8)
- (6) Ðær stodon mid Wulfstane wigan-N unforhte-A,
 there stood with Wulfstan warriors fearless (Mld 79)

(5)では形容詞 *leofne* と名詞 *hafoc* の間に動詞 *fleogan* が介在し、「形容詞＋名詞」の結合を分断している。また(6)では「名詞＋形容詞」の語順になっている。筆者の調査ではこれらを含め 15 例の有標な語順が生じる原因はすべて韻律規則が影響を与えていることが明らかとなった。

このように韻律の影響を受けやすい古英語韻文においては語順に何らかの規則性を見出すことは困難であり、それゆえ上述したように語順研究の対象からは除外されてきた。しかしながら、文レベルではなく、「属格名詞＋主要部名詞」のような小さな統語単位である名詞句の語順であれば、韻文であっても規則性を導き出すことは可能なのではないかと筆者は考える。

2. データの抽出方法

頭韻及び韻律規則の影響を受けていないデータを抽出するに当たっては注意を要する。特に頭韻に関しては名詞句の語順にも重大な影響を及ぼす。そこで藤原(1990:284-285)によって提案されている頭韻階級の原則に基づき、抽出すべきデータについて検討することとする。

(7) 頭韻階級の原則

(a) 古英語の語は頭韻上、以下の 4 つの類に大別される。

(i) 1 類……名詞、形容詞、派生副詞

(ii) 2 類……本来語の副詞の一部

(iii) 3 類……動詞 $\left\{ \begin{array}{l} 1 \text{ 類} \dots \text{非定形(不定詞、分詞)} \\ 2 \text{ 類} \dots \text{定形(但し、be 動詞と法助動詞は除く)} \end{array} \right.$

(iv) 4 類……機能語(接続詞、前置詞、代名詞)、本来語の副詞の一部、be 動詞、法助動詞

(b) 類の異なる複数の語が同一の半行中で共起する場合、頭韻に加わるのはより上位(1 類→4 類の順に下る)にある類の語である。

(11)=(7c)の制約に従えば、属格名詞とその主要部名詞はいずれも 1 類に属するわけであるから、a-verse が単一頭韻の場合は当該半行においてより左に位置する語、つまり第一韻脚を占める語が必ず頭韻に参加することになる。従って以下の(12a)で GN の語順になるのは G が頭韻語であるからであり、(12b)が NG の語順になっているには N が頭韻に参加しているからである。

- (12) a. folces-G hyrde-N fæstrædne gepoht.
 folk's guardian firmly-resolved thought (Bwf 610)
- b. sunu-N Healfdenes-G, secæan cwomon,
 son Healfdene's to seek came (Bwf 268)

以上のような理由から、a-verse であっても単一頭韻の場合は頭韻規則の制約を受けていると考えなければならない。よって、本研究において分析対象のデータとなりうるのは a-verse における二重頭韻の用例のみということになる。そしてこれらのデータのみを抽出し分析することによって、これまでほとんど扱われてこなかった古英語韻文の語順に関して名詞句という統語的には小さい単位ではあるものの何らかの傾向が示せるのではないかと筆者は考える。

古英語韻文の「属格名詞＋主要部名詞」の語順の詳しい分析に入る前に、まず次節では古英語散文における当該名詞句の語順について先行研究を踏まえつつ概略を示すこととする。

3. 古英語散文における「属格名詞＋主要部名詞」の語順

1 節で述べたように、現代英語において所有関係を表す場合は s 属格と of 属格の二通りの統語形式が存在するが、古英語期には of 属格はほとんど用いられることがなく、所有関係は屈折形によって表されていた。但し、古英語では「属格名詞(G)＋主要部名詞(N)」の語順は以下のように属格名詞が主要部に先行する場合(GN)もあれば後続する場合(NG)もあった。

- (13) a. þæs-G cyninges-G þegnas-N
 the king thanes
 'the king's thanes' (Chron A 755 / Rosenbach (2002:178))
- b. heafoð-N ealra-G haligra-G manna-G
 head all holy men
 'the head (leader) of all saints' (ÆCHom ii. 14.23 / ibid.)

古英語における「属格名詞＋主要部名詞」の語順研究の中心は主要部先行型と後続型との間にどのような差異があるのか、またこの二つの統語形式がどのように変化を遂げ、中英語以降の of 属格の登場につながったのかを解明することに置かれていた。Timmer (1939)では 9 世紀末の Alfred 大王時代(871-899)と 11 世紀の散文作品の調査結果が報告されている。この中で Timmer

は属格名詞の指示物を *proper names of persons*、*names of persons*、*others* に分け、それぞれ主要部に先行する場合と後続する場合の用例数を挙げている。Timmer の調査結果をまとめると以下のようなになる。⁴

Table 2: The number and percentage of GN and NG in 9th-century Old English prose

(a) *Dialogues(C)* I + II

	pre-position(GN)	post-position(NG)
proper names of persons	82 (68.3%)	38 (31.7%)
names of persons	165 (60.7%)	107 (39.3%)
others	293 (44.9%)	360 (55.1%)

(b) *Bede* I + II + III

	pre-position(GN)	post-position(NG)
proper names of persons	355 (83.9%)	68 (16.1%)
names of persons	143 (54.8%)	118 (45.2%)
others	390 (39.1%)	607 (60.9%)

(c) *Boethius*

	pre-position(GN)	post-position(NG)
names of persons	83 (69.2%)	37 (30.8%)
others	187 (48.3%)	200 (51.7%)

Table 3: The number and percentage of GN and NG in 11th-century Old English prose

(a) *Dialogues(H)* I + II

	pre-position(GN)	post-position(NG)
proper names of persons	100 (73.5%)	36 (26.5%)
names of persons	146 (81.1%)	34 (18.9%)
others	321 (57.9%)	233 (42.1%)

(b) *Wulfstan*

	pre-position(GN)	post-position(NG)
names of persons	102 (91.9%)	9 (8.1%)
others	196 (80.0%)	49 (20.0%)

(c) *Apollonius*

	pre-position(GN)	post-position(NG)
names of persons	40 (90.9%)	4 (9.1%)
others	59 (76.6%)	18 (23.4%)

Table 2 の初期古英語散文と Table 3 の後期古英語散文における「属格名詞＋主要部名詞」の語順の傾向を比較すると、固有名詞に関しては *Bede* では GN 型が 80%以上を占めているし、*Dialogues(C)*でも 70%近くが GN 型でその他のグループに比べても割合が高い。また、Timmer (1939:52)は *the Anglo-Saxon Chronicle* では *seo halgung þæs æfter filgendan bisceopes Ælfheages, se ðe...* (Chron. A (984))のように NG の語順になるのは属格名詞に關係節が後続する場合などであるが、このような例外を除いては、通例、固有名詞の属格形は主要部に先行すると述べている。⁵さらに、Mitchell (1985:550-551)は当該名詞句が二語だけから構成されている時、即ち、名詞句に指示代名詞や形容詞等が付加されていない時には、特に散文においては属格が固有名詞の場合は GN の語順が確立されていたと指摘し、*engel Godes* や *eðel Scotta* のような NG 型の例は存在しないと主張している。⁶このような事実を考え合わせると、Rosenbach (2002:178)も述べているように固有名詞の属格形は初期古英語期から後期古英語期を通じて主要部に先行する傾向が強かったと言える。

次に属格形が人物を表す普通名詞の場合を見ると、初期古英語では *Boethius* で約 70%、*Dialogues(C)*で約 60%、*Bede* でも半数以上が GN の語順を取っており、属格名詞が主要部に先行する傾向が強かったといえるが、これが後期古英語になると *Wulfstan* と *Apollonius* で 90%を超え、*Dialogues(H)*でも約 80%が GN 型であり、NG から GN への移行がかなり進んだことがうかがえる。この傾向はその他の名詞にも当てはまり、初期古英語では NG 型がやや優勢だったが、後期に入ると GN 型の語順が圧倒的になっている。

先行研究に示されたデータを基に上で観察したこのような散文作品に見られる初期古英語期から後期古英語期に掛けての NG 型から GN 型への語順の変化に関して Rosenbach (2002:178)は有生性(animacy)が非常に強く関与していると主張している。つまり、固有名詞の指示物は有生性が最も高いため古英語期全般を通して主要部に前置される傾向が強く、次に[+human]の素性を持つ普通名詞の属格形が NG 型から GN 型へ移行し始め、最後に[-human]の素性を持つ属格名詞が主要部に先行する傾向を強めたということである。⁷このような有生性と言語形式との関係は、本来 Silverstein (1976)で論じられたものである。Rosenbach (2002)は Silverstein (1976:122)に基づき以下のような有生性階層を示している。

- (14) 1st person > 2nd person > 3rd person > pronoun > proper name > human > animate > inanimate
(Rosenbach (2002:42))

Silverstein Hierarchy として知られているこの階層は左から右に行くにつれ有生性が下がることを示している。但し、(14)は人称(person)、話題性(topicality)、有生性(animacy)の三つの要素が混在している。これに対し Hawkins (1981)は以下のような有生性階層を提示し、現代英語における s 属格と of 属格の交替現象を説明している。

- (15) [HUMAN < [HUMAN ATTRIBUTE]] < [NON-HUMAN ANIMATE] < [NON-HUMAN INANIMATE] (Hawkins (1981:260))

(15)の階層でも一番左側の要素が最も有生性が高く、所有者を表す名詞の指示物の有生性が高いほど s 属格が用いられやすく、反対に有生性が低くなると、つまり有生性階層の右側に行くにつれ、of 属格が選択される傾向にあるとされる。これにより、例えば以下の(16)に示すような文法性の違いが説明できる。

- (16) a. Ann's car / *the car of Ann (Quirk et al. (1985:1277))
 b. Mary's cat / ?the cat of Mary (Hawkins (1981:260))
 c. the cat's basket / ?the basket of the cat (ibid.)
 d. *the house's front / the front of the house (Quirk et al. (1985:321))

以上、古英語散文における「属格名詞(G)+主要部名詞(N)」の語順に関して先行研究を踏まえながら、共時的事実及び通時的变化について概観した。その特徴は以下のようにまとめることができる。

- (17) a. 古英語では属格名詞は主要部名詞に先行する場合(GN)もあれば後続する場合(NG)もある。
 b. 固有名詞の属格は初期古英語期から後期古英語期を通じて主要部に前置される傾向が強かった。
 c. 初期古英語期から後期古英語期にかけて NG から GN へと次第に移行した。
 d. NG から GN への移行には有生性関わっている。つまり、[+human]の素性を持つ普通名詞の属格がまず主要部に先行する傾向を示し、その後で[-human]の素性を持つ属格名詞が前置されていった。

次節では(17)に示した古英語散文における「属格名詞+主要部名詞」に関する統語的特徴及び統語変化が古英語韻文における当該語順に関しても観察されるのかどうかを初期古英語の作品である *Beowulf*(8世紀)と後期古英語の作品である *The Battle of Maldon*(11世紀)を調査対象として取り上げ実証的に検討する。

4. 古英語韻文における「属格名詞+主要部名詞」の語順

4.1. *Beowulf*における「属格名詞+主要部名詞」の語順

初期古英語の韻文作品である *Beowulf*の a-verse を対象とし、属格名詞の指示物を有生性の観点から proper nouns, animate nouns, inanimate nouns に分けて、各々の主要部名詞との語順

を調査したところ、以下のような結果が得られた。⁸

Table 4: The number of GN and NG in the a-verses of *Beowulf*

(a) Proper Nouns

pre-position(GN)		post-position(NG)	
single allit.	double allit.	single allit.	double allit.
35	11	44	14

(b) Animate Nouns

pre-position(GN)		post-position(NG)	
single allit.	double allit.	single allit.	double allit.
41	36	2	27

(c) Inanimate Nouns

pre-position(GN)		post-position(NG)	
single allit.	double allit.	single allit.	double allit.
35	45	2	4

このうち、単一頭韻の用例を検証した結果、全て axAx の頭韻型を取っており、明らかに(7c)の制約を受けていることが確認された。従って、単一頭韻の用例はデータから除外することとして、二重頭韻の用例だけに着目して、proper nouns, animate nouns, inanimate nouns ごとに GN と NG の割合を出すと以下ようになる。

Table 5: The number and percentage of GN and NG with double alliteration in the a-verses of *Beowulf*

(a) Proper Nouns

GN	NG
11 (44.0%)	14 (56.0%)

(b) Animate Nouns

GN	NG
36(57.1%)	27(42.9%)

(c) Inanimate Nouns

GN	NG
45(91.8%)	4(8.2%)

Table 5 から初期古英語では韻文においても GN 型、NG 型の両方の語順が可能であったことが分かる。但し、有生性に関しては無生物名詞の属格形で GN 型が最も割合が高く、固有名詞で GN 型が一番割合が低いという散文とは全く正反対の結果が出た。

4.2. *The Battle of Maldon* における「属格名詞＋主要部名詞」の語順

では次に後期古英語の韻文作品である *The Battle of Maldon* の調査結果を Table 6 として以下に示す。

Table 6: The number of GN and NG in the a-verses of *The Battle of Maldon*

(a) Proper Nouns

pre-position(GN)		post-position(NG)	
single allit.	double allit.	single allit.	double allit.
10	4	0	0

(b) Animate Nouns

pre-position(GN)		post-position(NG)	
single allit.	double allit.	single allit.	double allit.
1	5	0	0

(c) Inanimate Nouns

pre-position(GN)		post-position(NG)	
single allit.	double allit.	single allit.	double allit.
0	4	0	0

用例数は少ないものの単一頭韻、二重頭韻を含めて NG 型は 1 例も存在せず、全て属格名詞が主要部に先行する GN 型である。つまり、後期古英語には韻文においても NG から GN への移行が完了していたことがうかがえる。

5. 結語

調査結果から古英語韻文における属格名詞とその主要部名詞の語順を古英語散文のそれと比較すると以下のようにまとめることができる。

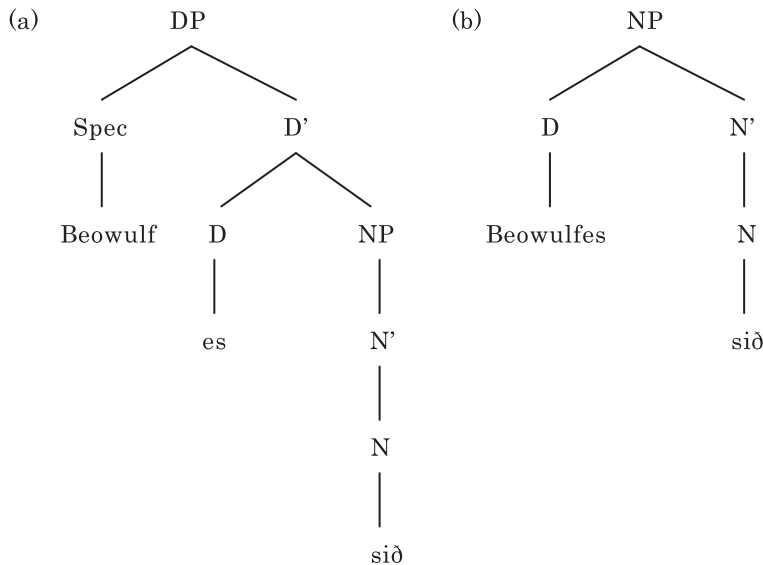
- (18) a. 初期古英語韻文では属格名詞は主要部に先行する場合(GN)もあれば後続する場合(NG)もある。
 b. 韻文においても後期古英語期には NG から GN への語順の移行は完了している。
 c. 韻文では NG から GN への語順の変化に有生性の関与は認められない。

本研究においては今まで扱われることの少なかった古英語韻文の語順に関して特に属格名詞と主要部名詞の語順を取り上げ考察を行った。その結果、散文における当該名詞句の語順に関する傾向と比較すると NG から GN への移行という英語史における当該名詞句に関する統語変化の一般性は韻文においても確認された。この NG から GN の語順の変化に関して散文では有生性が深く関わっていることが先行研究で指摘されていた。つまり、固有名詞の属格形は古英語全期を通じて主要部名詞に前置される傾向が好まれ、さらに NG から GN への変化は有生名詞から始まり、次に無生物名詞が変化を始めたということである。散文で観察された有生性の高い属格名詞が主要部に前置されやすいというこの傾向が、初期古英語の韻文作品である *Beowulf* では正反対

の結果が出た。つまり、無生物名詞の属格が主要部に先行する割合が最も高く、固有名詞の属格は半数以上が NG 型を取っていた。これは *Beowulf* という作品だけの問題なのか、それとも韻文全体に関わる問題なのかは今後の課題である。いずれにしても韻律規則はもちろん情報構造との関係などが複雑に絡んでおり意味論的な考察が不可欠になると考えられる。

注

1. 本研究が対象としている *Beowulfes sið*(=*Beowulf's expedition*)のような構造は以下のように DP もしくは NP のいずれかに分析されるが、本稿では DP 分析は採らず、NP として論を進める。



2. 現代英語でも s 属格や三人称単数現在の s などには総合的言語の名残が観察される。
3. 交差頭韻等は例外と見なす。
4. *Boethius*、*Wulfstan*、*Apollonius* の proper names of persons に関しては、Timmer (1939:52)は“*In the other texts the small number of proper names in the genitive did not seem worth paying special attention to.*”と述べ、用例数を明示していない。
5. Timmer (1939:52)は *Bede* や *the Dialogues* における固有名詞の属格形の生起位置に関するラテン語の影響について、以下のような実例を挙げ否定している。
- (a) B. I 150 *Scotta eðel* / L. *patria Scottorum*; B. III 3286 on *Eastseaxna mægpe* / L. *provinciae Orientalium Saxonum*
6. Mitchell (1985:550-551)は属格形が固有名詞かどうかに関わらず、「前置詞＋二語の名詞句」では、次の(a)に示すように属格名詞は規則的に主要部に前置されると主張している。
- (a) *ÆLS* 32.31 on *Norðhymbra lande*; *ÆCHom* ii. 30.7 on *mannes hiwe*; *ÆCHom* i. 32.8 for *middangeardes alysednysse*
- 従って、以下のような用例を見つけることは困難であると述べている。
- (b) *ÆCHom* i. 4.1 *fram frymðe middangeardes*; *ÆCHom* i. 78.4 *fram eastdæle middangeardes*; *ÆCHom* i. 288.34 on *ðrynnyse hada*

7. 固有名詞の属格形が主要部に前置されることが好まれるのは、固有名詞の指示物は本来的に話題性 (topicality)が高いためである。
8. 以下の(a)のように a-verse が重半行であるため GN もしくは NG が現れていても「A+G」や「A+N」で二重頭韻を踏んでいる例や、(b)のように(7d)の頭韻規則が適用され「V+G」や「V+N」で二重頭韻を踏んでいる例が合計 22 例存在するが、これらはデータには含めていない。

(a) beorht-A beacen-N godes-G; brimu swaþredon, (Bwf 570)

(b) worhte-V wæpna-G smið-N, wundrum teode, (Bwf 1452)

謝辞

本研究は平成 22 年度福井工業大学特別研究費の支援を受けている。記して謝意を申し上げる。

参考文献

- Allen, C. L. (2008) *Genitives in Early English: Typology and Evidence*, Oxford University Press, Oxford.
- Dobbie, E. V. K., ed. (1942) *The Anglo-Saxon Minor Poems: The Anglo-Saxon Poetic Records VI*, Columbia University Press, New York.
- Dobbie, E. V. K., ed. (1953) *Beowulf and Judith: The Anglo-Saxon Poetic Records IV*, Columbia University Press, New York.
- 藤原保明 (1990) 『古英詩韻律研究』 溪水社. 広島.
- Hall, J. R. C. (1960) *A Concise Anglo-Saxon Dictionary*, with a Supplement by H. D. Meritt, 4th ed., University of Toronto Press, Toronto.
- Hawkins, R. (1981) "Towards an Account of the Possessive Constructions: NP's N and the NP of NP," *Journal of Linguistics* 17, 247-269.
- 荻部恒徳他(編) (2007) 『古英語叙事詩ベーオウルフ対訳版』 研究社. 東京.
- Mitchell, B. (1985) *Old English Syntax*, Vol.1. Clarendon Press, Oxford.
- 入学直哉 (1998) 「OE 詩において韻律規則が統語に与える影響—名詞修飾語と被修飾名詞の生起位置を中心に—」『甲南英文学』第 13 号, 79-90.
- Quirk, R. et al. (1985) *A Comprehensive Grammar of the English Language*, Longman, London.
- Rosenbach, A. (2002) *Genitive Variation in English: Conceptual Factors in Synchronic and Diachronic Studies*, Mouton de Gruyter, Berlin.
- Sievers, E. (1968) "Old Germanic Metrics and Old English Metrics," in J. B. Bessinger and S. J. Kahrl, eds., *Essential Articles for the Study of Old English Poetry*, Archon Books, Connecticut.
- Silverstein, M. (1976) "Hierarchy of Features and Ergativity," in R. M. W. Dixon ed., *Grammatical Categories in Australian Languages*, Australian Institute of Aboriginal Studies, Canberra.
- Timmer, B. J. (1939) "The Place of the Attributive Noun-Genitive in Anglo-Saxon: with special reference to Gregory's "Dialogues"," *English Studies* 21, 49-72.

(平成 23 年 3 月 31 日受理)